

深い学びの実現に向けた学習過程の工夫

～数学科を軸とした各教科における見方・考え方を働かせた授業づくりを通して～

今年度は、「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト『実践研究協働校事業』の指定を受けています。

今回の授業研究会では、前回の教材研究会での学びを踏まえ、より信頼性・客観性を高めることを意図した言語活動の設定を検討しました。そこで「15歳の主張 in 中村中学校」と題し、15歳の今だからこそ伝えたいと思うことを、相手を決め、その相手に納得してもらうための信頼性・客観性のある情報を根拠として示す学習になるよう設定して行いました。

「実践研究協働校事業『授業研究会Ⅰ』」

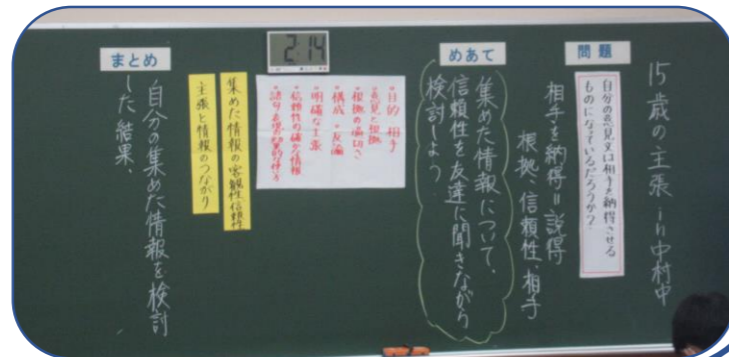
本時の授業での

PointⅠ 「信頼性・客観性のある情報の取捨選択」

- ・根拠となる情報は十分集まっているかの検討
- ・根拠となる情報がより信頼性の高い客観性のある情報であったかの検討
- ・検討後の情報の再収集や情報の整理

PointⅡ 「根拠とつながる情報であるか」

- ・集めた情報が自分の主張の根拠となる情報として適切か
- ・適切か否かを基に情報の整理や構成の検討



◇本校の先生方より◇

◆深い学びの実現に向けた手立て（「問題」と「めあて」の工夫など）ができていたか。

- 自分の主張が信頼性・客観性があるか他人に聞くことで検討しようとしていた。
- 自らの意見文をよりよくしたいという姿勢が見られた。
- これまでの学習を振り返りながら、本時に何を考える必要があるかを共有してめあてが提示できた。
- 生徒が本当にやりたいことが問題になっているか。
→なぜ納得させる必要があるのかを、前時以前に話し合っておけばよいのではないか。
- 「なぜ客観性・信頼性が必要なのか」ということが生徒と十分に共有されていなかったのでは。
→教師が客観性・信頼性を提示するのではなく、生徒自身が他の情報ではだめだと思えるような発問や活動があればよかった。
- 生徒自身が「自分の主張と集めた情報がリンクしていない」という困り感を持っていなかった。
→まずは主張させてみて、困り感や疑問を持たせる手立てを取るとよいのではないか。

◆教科の見方・考え方を働かせて課題解決をさせる手立てができていたか。

- 客観性・信頼性については一定働かせていたと思う。単元の始まりから確認し続けたことで、生徒の中で意識化されていたと思う。
- 話し合い活動の方法を動画で見せたことで、具体的に何をどのように話せばよいか分かったと思う。
- 自分の主張を考え直したり、調べ直したりする場面が設定されていた。
- 信頼性にとらわれ過ぎていたのではないか。
→客観性を持たせる信頼性など、客観性と信頼性を関連付けて考えさせることはできないか。
- 信頼性についての確認が不十分だった。
→教科書等で押さえる。または信頼性について議論をする時間をとる。
- 主張と情報を関連させて考える点が弱かった。教師側が具体的な姿をイメージしきれていない。
→生徒の姿のイメージを具体的に多く持つておく。手元に資料として持つておくとういのではないか。

◆これからの自分の教科で単元をデザインしていくために参考になったこと。

- ◎自分の思いだけでなく外からの情報も入れて考えることは、その時々ではなく、計画をしておくこと。
- ◎既習の学びを一つ一つ確かめながら、新しい学びや深い学びにつなげていくこと。
- ◎単元の作り方は英語科と似ている部分があるので、学びを調整するイメージ図は英語科でもしっかりイメージしておかないといけないと感じた。
- ◎理科でも根拠を基に検討しようとする場面が多いので、根拠をどのように自分の中に持たせるのかというプロセスが参考になった。
- ◎どのような資質・能力を育てたいのか、そのためにどのような過程で、どんな力をつけ、生かしていくのか、しっかり考えたいと思った。
- ◎中3段階で求められている「書くこと力」を学習指導要領で確認し、ぶれない指導ができること。
- ◎小学校、高校との系統も考えてどの段階でどのような見方・考え方を働かせると、付けたい力に向かえるのかを検討し、本単元に生かしていること。